

使徒の働き12章「陰府の門が勝てない教会」

1A ヘロデの迫害 1-4

2A ペテロの救出 5-17

1B 熱心な祈り 5

2B 御使いによる救い 6-11

3B 祈りの答えを信じない人々 12-17

3A ヘロデへの裁き 18-23

1B 番兵の処刑 18-19

2B 主の使いによる死 20-23

4A みことばの広がり 24-25

本文

私たちの学びは、使徒の働き 12 章に入ります。8 章から 12 章までは過渡期であることを、以前お話しました。それは、エルサレムの教会で、ステパノが石打によって殉教し、それで人々がそこから散っていきました。そのことによって、サマリアへの宣教、そして異邦人への宣教が進むことになります。そして 13 章において、アンティオキアの教会からの、バルナバとサウロの宣教が始まります。エルサレムから始まった聖霊の働きが、異邦人への宣教の旅へと広がっていくのです。

その前に、12 章です。エルサレムで教会の指導者を、ヘロデが殺します。けれども、ヘロデ自身が主によって打たれ、死にます。教会における神の力の現れを見ていきます。

1A ヘロデの迫害 1-4

¹ そのころ、ヘロデ王は、教会の中のある人たちを苦しめようとしてその手を伸ばし、² ヨハネの兄弟ヤコブを剣で殺した。³ それがユダヤ人に喜ばれたのを見て、さらにペテロも捕らえにかかった。それは、種なしパンの祭りの時期であった。

ここの「ヘロデ王」は、ヘロデ・アグリッパ一世のことです。新約聖書には、ヘロデ王と言っても、同じ人物ではないので、誰かを知っていく必要があります。イエスが生まれて、東方の博士たちがエルサレムを謁見した時のヘロデは、ヘロデ大王です。ローマから任されてユダヤ人を治める王として君臨し始めました。そして、ヘロデ大王がユダヤ人の血筋を持つマリヤムネー一世という、ハスモン朝の王女と結婚していました。彼女との間に、アリストブロスという息子が生まれました。後に、ハスモン朝との関係があってはいけなかったヘロデ大王は、自分の妻マリヤムネと息子アリストブルスを殺してしまいます。けれども、アリストブロスには既に結婚しており、ヘロデ・アグリッパ一世を生んでいたのです。

ちなみに、イエスが公生涯を送られていた時のヘロデは、ヘロデ・アンティパスで、アグリッパ一世のおじに当たります。そして、アグリッパ一世には息子がいて、アグリッパ二世です。パウロが、カイサリアで幽閉されて、弁明する時にそれを聞いたヘロデは、アグリッパ二世です。

ここ 12 章のヘロデ・アグリッパ一世に戻りますが、どうして教会の人たちを苦しめ始めたのでしょうか？「ユダヤ人に喜ばれた」とあります。彼の政治生涯は、ユダヤ人に気に入られようとしたものだったようです。金使いの荒さで有名で、ローマでその返済に困っていたアグリッパ一世は、後に皇帝になるカリグラと交友の仲になり、それでイスラエルの地に戻って王の肩書きが与えられました。自身にも祖母がマリムネ一世で、ユダヤ人の血は流れているし、ユダヤ人と仲良くするために、律法や慣習を守っていました。そこで、彼らが、エルサレムの教会に反対していることを知って、それでその指導者に手を伸ばしたということです。

指導者として、「ヨハネの兄弟ヤコブ」を殺しました。ヤコブについては、十二使徒で他にも「アルパヨの子ヤコブ」がいますが、同名なので、「ヨハネの兄弟ヤコブ」とルカは書いています。「マル 1:19-20 また少し先に行き、ゼベダイの子ヤコブと、その兄弟ヨハネをご覧になった。彼らは舟の中で網を繕っていた。20 イエスはすぐに彼らをお呼びになった。すると彼らは、父ゼベダイを雇い人たちとともに舟に残して、イエスの後について行った。」このヨハネとヤコブですが、「雷の子」という名が与えられましたね(マルコ 3:17)。サマリア人が、イエスを受け入れなかったので、ヨハネと共に、「ルカ 9:54 主よ。私たちが天から火を下して、彼らを焼き滅ぼしましょうか。」と言った弟子です。なんとも、欠点の多い弟子ですが、主の憐れみと恵み、聖霊の力によって、主の御名のゆえに殉教者にまでなっています。

この二人が、母と共に、イエスのところに来て、主が御国で栄光の座に着かれた時には、一人をあなたの右に、もう一人を左にとお願いしに行った人々です。その時に彼らに主は言われます。「マル 10:38-39」あなたがたは、自分が何を求めているのか分かっていません。わたしが飲む杯を飲み、わたしが受けるバプテスマを受けることができますか。」39 彼らは「できます」と言った。そこで、イエスは言われた。「確かにあなたがたは、わたしが飲む杯を飲み、わたしが受けるバプテスマを受けることになります。」主がここで言われているのは、十字架における苦しみと死です。事実、ヤコブがここで、主の御名のゆえに殉教するのです。ヨハネは殺されませんでしたが、言い伝えによると、彼は煮えたぎった油に入れられますが、そこから奇跡的に救われます。そして、パトモス島に流刑になったと言われます。いずれにしても、主にある苦しみにあずかっています。

そして、ヤコブは、ペテロとヨハネと共に、イエスが近くに引き寄せた三人の弟子のうちの一人です。ヤイロの娘を生き返らせるとき、主は近くにいさせました。高い山に登られて、御姿が変貌した時も、この三人が目撃しています。それから、ゲッセマネの園で祈られる時も、三人をさらにご自身に引き寄せて、近いところにいさせました。その一人ヤコブが、今、十二使徒の中で初めて殉教

した人になりました。

そしてペテロもヘロデは捕えましたが、これから見ればわかりますが、彼は死から救われます。この違いは何でしょうか？人々は、神はペテロを守られたが、ヤコブは守られなかったのでしょうか？これは現実の問題であり、主のために多く労した人が、早死にすることがあります。あるいは、ある若い家族がこれから宣教地に遣わされそうとしていた時に、交通事故で亡くなったという話を読んだことがあります。

しかし私たちは、主のなさること、その御思いは、私たちには計り知ることができないと知るべきです。次に私たちは、ヤコブと、次のペテロの救出に二つの原則が働いているのを見ます。ヤコブの殉教には、主ご自身が語られたように、キリストの苦しみが見えます。これも、キリスト者が信仰のゆえに耐え忍ぶように、召されている部分です。黙示録の七つの教会を見ると、スミルナの教会など、死に至るまで忠実であれという激励を、イエスご自身がしておられます。それは、死んだ後のいのちが、復活のいのちの報いが保障されているからです。

そしてペテロは、これから見ていきますが、復活の原則が働いています。主イエスは、死の縄目に縛られていましたが、いのちの君であるからをそこに縛っておくことはできませんでした。「2:24 しかし神は、イエスを死の苦しみから解き放って、よみがえらせました。この方が死につながれていることなど、あり得なかったからです。」一方では、キリストの苦しみにあずかる証しをし、もう一方では、死からのよみがえり、そのいのちの力の証しを立てているのです。どちらにも、キリスト者は召されています。

⁴ ヘロデはペテロを捕らえて牢に入れ、四人一組の兵士四組に引き渡して監視させた。過越の祭りの後に、彼を民衆の前に引き出すつもりでいたのである。

3 節で「種なしパンの祭りの時期」であったとあります。さらに、「過越の祭りの後に、彼を民衆の前に引き出す」ともあります。過越の日がニサンの月の十四日で、日没後の十五日に種なしパンの祝いが七日間、あります。一対になっている祭りです。その時は、人を死刑にするなど、ユダヤ人の慣習ではいけないことになっていました。(けれども、ユダヤ人が、過越の祭りの時にイエス様を十字架に付けたことを思い出してください。あれは、指導者たちが自分たちの設けた規則をことごとく破った、究極の偽善的行為でした。ただ、過越の祭りの時は避けようとしていましたが、そうなくなりました。神のご計画があったからです。)ヘロデは、過越の祭りの時期という、民族的に熱狂する時に、ヘロデはこのパフォーマンスをやっているのでしょうか。この時期は避けて、それでその後で殺す手はずにさせました。

そして、「四人一組の兵士四組に引き渡して監視させた」と言っていますが、合計 16 名です。一

日を四つに、つまり 6 時間ずつに分けて、一組四人が監視していくことになります。二人が直接、それぞれ左右にペテロに鎖をかけて、自分につないでいます。そして、もう二人がその部屋の入口の番をしています。その四人が、六時間ごとに交替します。主の墓を、ピラトが番兵たちに番をさせて、石で封印をさせたことを思い出します。

2A ペテロの救出 5-17

1B 熱心な祈り 5

⁵こうしてペテロは牢に閉じ込められていたが、教会は彼のために、熱心な祈りを神にささげていた。

ペテロは物理的に牢で閉じ込められています。けれども、教会は彼のために、熱心な祈りが捧げられています。祈りは、物理的な制限や障壁に制限されることはありません。「Ⅱコリ 10:4 私たちの戦いの武器は肉のものではなく、神のために要塞を打ち倒す力があるものです。」祈りには、地と天をつなぐ力が与えられています。「マタ 18:18-19 まことに、あなたがたに言います。何でもあなたがたが地上でつなぐことは天でもつなぐがれ、何でもあなたがたが地上で解くことは天でも解かれます。19 まことに、もう一度あなたがたに言います。あなたがたのうちの二人が、どんなことでも地上で心を一つにして祈るなら、天におられるわたしの父はそれをかなえてくださいます。」

そしてここに、「熱心な祈り」とありますね。このギリシア語は、熱心にとりかかっている、絶え間なく祈っていたという意味合いがあります。パウロは、エペソ人への手紙で、「忍耐の限りを尽くして祈りなさい。」と勧めました(6:18)、イエスは不正の裁判官の喩えで、「ルカ 18:7 まして神は、昼も夜も神に叫び求めている、選ばれた者たちのためにさばきを行わないで、いつまでも放っておかれることがあるでしょうか。」と言われました。

2B 御使いによる救い 6-11

⁶ヘロデが彼を引き出そうとしていた日の前夜、ペテロは二本の鎖につながれて、二人の兵士の間で眠っていた。戸口では番兵たちが牢を監視していた。

ある注解によると、神殿の敷地の北に隣接する、アントニオ要塞ではなかったのか？と言われていました。引き出そうとしていた前夜ということです。本当にぎりぎりの時です。

⁷すると見よ。主の使いがそばに立ち、牢の中を光が照らした。御使いはペテロの脇腹を突いて彼を起こし、「急いで立ち上がりなさい」と言った。すると、鎖が彼の手から外れ落ちた。⁸御使いは彼に言った。「帯を締めて、履き物をはきなさい。」ペテロがそのとおりにすると、御使いはまた言った。「上着を着て、私について来なさい。」

御使いは、一つ一つ、短い指示を与えています。急いで立ち上がりなさい、帯を締めて履き物をは

きなさい、そして、上着を着て、ついて来なさいと。ペテロは素直に、聞き従っています。ところで、今の服にはないのが、「帯を締める」ですが、一枚の布で着物が作られていて、大きな運動をする時は、足まで垂れている部分を帯で締めて足が動かしやすいようにします。

⁹ そこでペテロは外に出て、御使いについて行った。彼には御使いがしていることが現実とは思えず、幻を見ているのだと思っていた。¹⁰ 彼らが、第一、第二の衛所を通り、町に通じる鉄の門まで来ると、門がひとりでに開いた。彼らは外に出て、一つの通りを進んで行った。すると、すぐに御使いは彼から離れた。¹¹ そのとき、ペテロは我に返って言った。「今、本当のことが分かった。主が御使いを遣わして、ヘロデの手から、またユダヤの民のすべてのもくろみから、私を救い出してくださいましたのだ。」

厳重な監視であったのが、すべてを通り越しています。門が閉じられているとありますが、エルサレムは城壁で囲まれていて、日没になると門が頑丈に閉じられます。それが開きました。そして、一つの通りのところまで行きました。ようやくペテロは我に返りました。主が御使いを遣わし、ヘロデとユダヤ人から救い出して下さったのだと分かったのです。この前の、コルネリウス一家の救いもそうでしたね、主が介入された時、幻を見せられた時は分からなかったけれども、後になって分かりました。

主が復活された時も、そこにはローマの番兵がいて、けれども、御使いが来て、番兵の力が無力にされて出てこられました。その復活の力がここに働いていて、「縛られていても、解き放たれ、立ち上がることができる」という流れがあります。

3B 祈りの答えを信じない人々 12-17

¹² それが分かったので、ペテロは、マルコと呼ばれているヨハネの母マリアの家に行った。そこには多くの人々が集まって、祈っていた。

ペテロはすぐさま、教会に向かいました。教会と言っても、当時は、ここにあるように「家」です。ユダヤ人による迫害が強くなってから、なおのこと人目に隠れたところで集まっていた可能性があります。ここで、「マルコと呼ばれているヨハネの母マリアの家」とあります。ヨハネはユダヤ人の名前ですが、ギリシア語の別名もあり、それがマルコです。このマルコは、マルコによる福音書のマルコであります。彼はまだかなり若かったと思われます、マルコの福音書には、こんな逸話が書いてあります。「14:51-52 ある青年が、からだに亜麻布を一枚まとっただけでイエスについて行ったところ、人々が彼を捕らえようとした。すると、彼は亜麻布を脱ぎ捨てて、裸で逃げた。」そしてこのヨハネ、あるいはマルコが、バルナバまたサウロと共に宣教旅行に行きます。

母マリアは、この家が大勢の人が集まることができるので、裕福な人の寡婦だったのでしょう。

定かではありませんが、上町と呼ばれる、裕福な人たち、祭司たちが住んでいる町にあったのかもしれませんが。アントニオ要塞から上町へは、東から西へ向かいます。

¹³ 彼が門の戸をたたくと、ロデという名の召使いが応対に出て来た。¹⁴ そして、ペテロの声だと分かると、喜びのあまり門を開けもせず奥に駆け込み、ペテロが門の前に立っていることを知らせた。¹⁵ 人々は彼女に「あなたは気が変になっている」と言ったが、彼女は本当だと言い張った。それで彼らは「それはペテロの御使いだ」と言った。¹⁶ だが、ペテロは門をたたき続けていた。彼らが開けると、そこにペテロがいたので非常に驚いた。

非常に興味深い反応です。ロデという女中だけが、ペテロが来たことを確信して、喜びのあまり知らせに行きました。戸を開ければよいものを、閉じたまま行ってしまいました。相当興奮していたのでしょう。ところが、彼女は信じていたのですが、他の人たちが、「**あなたは気が変になっている**」と言っています。興味深いですが、だって、イエス様が復活した時もマグダラのマリアや女たちが復活したのを伝えても、やはり同じような反応だったのです。ロデが言い張るので、「**それはペテロの御使いだ**」と言い直しています。ユダヤ人の信仰には、それぞれを守る御使いがいると思われていました。イエスも幼き子に、御使いがいることを言及している箇所があります(マタイ 18:10)。

つまり、彼らはきちんと信じていなくて祈っていた、ということです。ペテロを救い出してくださいと祈っているのに、実際に救い出されたら信じられないと言っているのですから滑稽ですが、私たちはしばしば、この過ちを犯してしまいますね。イエスは、よみがえられた後に弟子たちの心の鈍さを戒められましたが、私たちにも戒められます。けれども、その戒めは、嬉しさのこもった戒めであり、つまり、私たちの不信仰にもかかわらず、主は祈りを聞かれて事を行ってくださるのだということです。神の恵みの主権が働いているのです。

¹⁷ ペテロは静かにするように手で彼らを制してから、主がどのようにして自分を牢から救い出してくださったかを彼らに説明し、「このことをヤコブと兄弟たちに知らせてください」と言った。そして、ここを出て、ほかの場所へ行った。

ペテロは、自分が脱獄したことで、騒動が起こることは時間の問題だということを知っていますから、静かにするように制しました。そして、どのように主が脱獄させてくださったかを説明したら、すぐに他の場所に行きました。エルサレムの町から出て行ったのでしょう。

そしてここで、「**このことをヤコブと兄弟たちに知らせてください**」とあります。このヤコブは、イエスの半兄弟です。イエスは処女降誕で生まれましたが、他の弟は、父ヨセフとマリアとの間に生まれています。初めは、他の弟たちと同じように、イエスを信じていませんでした。けれども、主が復活して、ヤコブにも現れてくださいました。「**Ⅰ コリ 15:7 その後、キリストはヤコブに現れ、それから**

すべての使徒たちに現れました。」このヤコブが、「ヤコブの手紙」を書いた人です。

ペテロがエルサレムの教会で指導者であったところが、ペテロはいろいろ巡回するようになっていた中で、エルサレムの教会を監督する人として、ヤコブが立っていました。15 章でも、エルサレムにおける会議で重要な役割を果たします。パウロが最後のエルサレムの旅でも、迎えてくれたのはヤコブでした(21:18)。

3A ヘロデへの裁き 18－23

1B 番兵の処刑 18－19

¹⁸ 朝になると、ペテロはどうなったのかと、兵士たちの間で大変な騒ぎになった。¹⁹ ヘロデはペテロを捜したが見つからないので、番兵たちを取り調べ、彼らを処刑するように命じた。そしてユダヤからカイサリアに下って行き、そこに滞在した。

ヘロデは、番兵たちを処刑してしまいました。ローマの法律で、番兵が囚人を逃してしまうと、その課せられた罰を同じように受けるというものがありました。ペテロを殺すつもりでいたので、番兵も殺されたのです。何とも過酷であり、ヘロデの自己中心性と無慈悲さが表れています。

そして彼は、ユダヤ属州の首府になっていたカイサリアに下っていき、滞在します。カイサリアは、使徒の働きに入ってから何度となく出て来るところですね。伝道者ピリポがそこに住み始めました。パウロがエルサレムからタルソに逃げる時に、そこから出る船に乗りました。そして、コルネリウスの一家はカイサリアに住んでいます。カイサリアは相当、大きな町でした。そこにヘロデが行きますが、ヘロデの宮殿があります。海の中に突き出ている建物で、今でもその一部が遺跡で見ることができます。きれいなモザイクも残っています。しかし、ヘロデのこれらの仕業に対する神の裁きが、このカイサリアでもたらされます。

2B 主の使いによる死 20－23

²⁰ さて、ヘロデはツロとシドンの人々に対してひどく腹を立てていた。そこで、その人々はそろって王を訪ね、王の侍従ブラストに取り入って和解を願い出た。彼らの地方は王の国から食糧を得ていたからである。

ヘロデは、隣国との外交問題を抱えていました。ツロとシドンは、イスラエルの北にあるフェニキアの都市国家です。かつて、イスラエルの王ソロモンは、神殿のための杉材を得るために、時の王ヒラムと契約を結びました。杉材や職人を送る代わりに、ヒラム一族の食べ物を与えました(1列王 5:9)。その時から伝統がもしかしたら続いていたかもしれません。エゼキエルの時代にも、イスラエルとユダと交易をして、小麦や、きびを含んだ商品を受け取っていた様子が書いてあります(27:17)。その時、特に飢饉が起こっていました。覚えていますか、アンティオキアの教会で、預言

者アガボが来て、世界中に大飢饉が起ると警告していました(11:28)。ですから、ヘロデが制裁をかけて食糧を輸出していなかったのでしょう、それで切羽詰まっていた。それで侍従ブラストを味方につけて、和解しようとしていました。

²¹ 定められた日に、ヘロデは王服をまとい王座に着き、彼らに向かって演説をした。²² 集まった会衆は、「神の声だ。人間の声ではない」と叫び続けた。

この「定められた日」とは、皇帝クラウディスを称えるための祭りだったそうです。そこに、ツロとシドンの人たちが集まりました。ヘロデ大王が建築した建物です。今でも、カイサリアには人々の集まる円形劇場や競馬場などの遺跡が残っていますが、たいそう豪華なところです。

そこで、「王服を」まっています。歴史家ヨセフスによると、銀製の王服で、朝日に照らされて見事な輝きを放っていました。そこで演説をした時、彼にへつらっていますから、ツロとシドンの人々は、「神の声だ。人間の声ではない」として叫ぶのです。ヨセフスも、「たといこれまでは陛下を人間として恐れてきたけれども、これからは不死のお方です。」と言ったと書いてあります。

覚えていますか、ペテロなど使徒たちは何度となく、自分たちに何か力があるかのように、信心深さがあるかのように見てはいけなかった。イエスの御名の力によって足なえが立ち上がったのだということ。またコルネリウスがひれ伏した時も、同じ人間であるとして立ち上がらせたこと。ペテロは、神の栄光に自分が触れることがないように注意深くしていました。ところがヘロデは、そのへつらいの言葉をそのまま受け入れて行ったのです。人の称賛、祭り上げを受け入れることは、非常に危険です。自分をおかしくさせます。

²³ すると、即座に主の使いがヘロデを打った。ヘロデが神に栄光を帰さなかったからである。彼は虫に食われて、息絶えた。

「箴 16:18 高慢は破滅に先立ち、高ぶった霊は挫折に先立つ。」とあります。かつて、バビロンの王ネブカドネツアルが、自分の力によってこのバビロンは建てられたと誇っていた時、ちょうどその時に天の御使いが来て、彼が獣のようになると宣言し、果たしてその通りになりました。ここでも主の使いがヘロデを売っています。

「彼は虫に食われて、息絶えた。」とありますが、当時は寄生虫の巨大なのがあり、腸に穴を開けるほどのものがあつたそうです。ヨセフスがここでの出来事を詳細に記録しています。初めに、心臓に刺すような痛みを覚えたそうです。それから全身が痛くなり、締め付けるような痛みが胃を襲いました。それで宮殿に運ばれ、5 日間、腹部の痛みで消耗しきった王は息絶えた、と書いてあります。(「ユダヤ古代誌」第 XIX 卷 8 章 2 節)

しかし、ルカは、そこには霊的な裁きが会ったことを記しています。これは、主の使いが行ったということです。ペテロを牢屋から助け出した御使いが、ここではヘロデを打っているのです。

4A みことばの広がり 24－25

²⁴ 神のことばはますます盛んになり、広まっていった。

このことを通して、さらに神のことばが進んで行ったのです！使徒の働きには、いろいろな出来事の中でさらに御言葉が広がったことを、ルカは書き記しています。やもめへの配給のことで問題が起こったけれども、七人の執事が選ばれた後で、こうあります。「6:7 こうして、神のことばはますます広まっていき、エルサレムで弟子の数が非常に増えていった。また、祭司たちが大勢、次々と信仰に入った。」そして、迫害がエルサレムで起こって、散っていき、けれども、迫害の急先鋒であったサウロが回心した後で、こんな言葉があります。「9:31 こうして、教会はユダヤ、ガリラヤ、サマリアの全地にわたり築き上げられて平安を得た。主を恐れ、聖霊に励まされて前進し続け、信者の数が増えていった。」課題や問題があるけれども、そこで御霊に従って生きている中で、神が勝利を与えてくださっているのです。

そして、ここでは、死に打ち勝つ教会の姿を見ることが出来ました。ヤコブの殉教がありましたが、その死によって教会は終わることなく、むしろ打ち勝っていったのです。イエスが、ペテロにこう言われていました。「マタ 16:18 そこで、わたしもあなたに言います。あなたはペテロです。わたしはこの岩の上に、わたしの教会を建てます。よみの門もそれに打ち勝つことはできません。」陰府はハデス、死者の行く所です。死もそれに打ち勝つことはできないのです。

²⁵ エルサレムのための奉仕を果たしたバルナバとサウロは、マルコと呼ばれるヨハネを連れて、戻って来た。

話が 11 章の終わりに戻ります。この 12 章の出来事があったあたりに、バルナバとサウロがエルサレムに来ていました。救援物資を渡す奉仕をしていたのです。

それで、ここから、先ほど出て来たマルコの名が登場します。バルナバとサウロがマルコを連れて行って、アンティオキアの教会まで行き、13 章、二人がその教会によって宣教のために遣わされる時に、マルコもお供することになります。マルコは、バルナバのいとこであるとパウロがコロサイ書で言っています(4:10)。

こうやって、主は、ヤコブの死を決して無駄にされない方であることが分かりました。彼は、キリストの苦しみを証しました。けれども、キリストが死に縛られていないことを、ペテロが証しました。そして主は祈りに聞かれます。その祈りがみこころにかなうものであれば、彼らが信じる以上に、

恵みによって、それをかなえてくださるのです。最後に、ここを読みます。「エペソ 3:20-21 どうか、私たちのうちに働く御力によって、私たちが願うところ、思うところのすべてをはるかに超えて行うことのできる方に、21 教会において、またキリスト・イエスにあって、栄光が、世々限りなく、とこしえまでもありますように。アーメン。」